

学的実践としての「エスノグラフィック・アーティファクト」の検討

まちづくりプロジェクトにおける人類学者の「発明品」を対象として

早川公（仁愛大学）

本発表は、人類学が学的実践としてきたエスノグラフィの拡張可能性を、日本のまちづくりプロジェクトにおける人類学者の関わりの仕方から検討するものである。

近年の人類学界では、フィールドワークという実存的実践に基づく精緻な他者理解という志向だけでなく、フィールドに生じる種々の問題を解決する志向の重要性が増している。例えば、2012年に立ち上がった課題研究懇談会「応答の人類学」（～2018年）では、既存の応用人類学や実戦人類学等の展開を踏まえつつ、「人類学の知を他領域に応用する」という論点に留まるのではなく、むしろ、フィールドワークと民族誌という人類学の営みそれ自体を、フィールドの人たちを含む同時代の諸関係の中に置き直す具体的な方法¹⁾を検討してきた。ここで問われているものは、現場（フィールド）との諸関係の中に身を置きながら、それでいて人類学的と特徴づけられる具体的な様態を提示することである。

こうした状況のもと、「共創」は、相互に関係し合う状況で、新たな何かを創り出すことを表現する概念として提示されてきた。この概念は、本田技研工業の久米氏がものづくりの現場における重要なスローガンとして提唱したと言われる[吉田 2001:14]。また清水博は、自身の専門である生命科学から展開させた「場」の原理に基づき、「共創」を来たるべき社会に必要な概念として早くから注目してきた[2000]。一方、まちづくり／地域づくりにおいて、共創を推進し、国内各地で具体的な事業を展開するじやらんリサーチセンター（JRC）は、共創に必要な原理を自身のウェブサイトで紹介している²⁾。フィールドとホーム、あるいは研究と実務の境界線が複雑化・曖昧化する中で、人類学はいかにフィールドのヒト・モノ・コトと関係していくのであろうか。

その問い合わせについて、本発表では、発表者が関わったまちづくりプロジェクトを対象として検討する。まちづくりは、今や特定の属性の人びとが関与するものではなく、とりわけ大学に籍を置く研究者にとっては、「社会的要請」の看板のもと、実務として関与せざるを得ないものとして直面することも多い。その「成果物」は、人類学者にとって必ずしも論文の形式をとりはしない。むしろそれは、報告書や具体的なモノ、イベントのような不定形なコト、あるいは仕組みのようなものとして現れる。この人類学者が対象社会との関係の結果生まれる様々なものを、本発表では「エスノ

グラフィック・アーティファクト」と設定し、それらが人類学的実践の新たな可能性として提示できるかどうかを議論することにしたい。

対象とするのは、茨城県つくば市北条地区で実施された複数のまちづくりプロジェクトである。対象地域では、2005年のつくばエクスプレスという鉄道開通を契機として、地区内の商店主を中心にまちづくりプロジェクトが開始された。発表者は、対象地域において、当時大学院生として2007年から関わりを開始し、2009年にはNPO法人を立ち上げ、その代表として関わった。本発表では、これらの関わりから、

- (a)「北条ふれあい館」改修プロジェクト(2007年)
- (b)「地域通貨マイス」流通実験プロジェクト(2009年)
- (c)コンテンポラリーダンス・プロジェクト(2010年)
- (d)婚姻儀礼「提灯取替え」復活プロジェクト(2013年)

をとりあげ、それぞれのプロジェクトにおけるアクターの関係や、プロジェクト・プロセスに注目する。その上で、プロジェクトを通じて生み出されたものを、人類学の新たな成果としての「エスノグラフィック・アーティファクト」とみなしうる要件について検討する。

- 1) 「応答の人類学 趣旨」
http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/jasca_outou/purpose/ (2018/12/14 参照)
- 2) 「コクリ！プロジェクト地域が音を立てて変わる「5つのポイント」」
<http://jrc.jalan.net/cocre/cocre/5vp/> (2018/12/14 参照)

参考文献

- 清水博、2000、「共創と場所—創造的共同体論」、清水博編、『場と共に』 pp.23-178、NTT出版。
吉田恵吾、2001、『共創のマネジメント ホンダ実践の現場から』、NTT出版。

キーワード 応用人類学、まちづくり、共創、エスノグラフィック・アーティファクト